

# 第1章 日野町の概要

## 1. 自然的・地理的環境

### (1) 位置・面積

日野町は、鳥取県南西部に位置し、町の中央を一級河川の日野川が流れ、東は岡山県真庭郡新庄村、西は日野郡日南町、南は岡山県新見市と日野郡日南町、北は日野郡江府町、西伯郡伯耆町と同南部町に接しています。面積は 133.98 k m<sup>2</sup>で、鳥取県の総面積の約 3.82%を占めています。

### (2) 地名

史料上の「日野」という地名の初見は出雲国風土記の中の仁多郡の条とされています。その後『和妙類聚抄』（平安中期）に、日野郡には葉路・阿太・神戸・武庫・日野・野上の六郷があったと記載され、中世・近世の各種史料上にも「日野」という地名は散見されます。また、『伯耆民諺記』（江戸中期）や『伯耆誌』（江戸後期）には表1-1の字名が見られ、明治期以降の合併へとつながります。

明治22年に日野郡内の宿や村の合併が行われ、根雨村、真住村、安井村、渡村、黒坂村、菅福村の6つの行政区画ができました。その後、大正2年に根雨村と真住村が根雨町に、安井村と渡村が日野村に、黒坂村と菅福村が黒坂村に合併しました。さらに、昭和11年に黒坂村が黒坂町に、昭和28年に根雨町と日野村が根雨町になり、昭和34年に根雨町と黒坂町が合併し、現在の日野町となりました。

表1-1 合併の変遷

村・町の変遷				
江戸後期	明治22年	大正2年	昭和	昭和34年～
根雨宿、板井原宿、 <small>かもち</small> 金持村、 <small>たかお</small> 高尾村、 <small>みたに</small> 三谷村、 <small>かいばら</small> 貝原村	→ 根雨村	→ 根雨町	→ 根雨町 (昭和28年)	→ 日野町
<small>みつち</small> 三土村、 <small>かどたに</small> 門谷村、 <small>あきつな</small> 秋縄村、 <small>にぶたに</small> 濁谷村	→ 真住村			
<small>やすほら</small> 下榎村、 <small>つち</small> 安原村、 <small>つち</small> 津地村、 <small>のた</small> 野田村、 <small>ふなば</small> 舟場村	→ 安井村	→ 日野村		
<small>おくべつしよ</small> 本郷村、 <small>こばら</small> 奥別所村、 <small>こばら</small> 小原村、 <small>えち</small> 榎市村	→ 渡村			
<small>しもぐろさか</small> 黒坂宿、 <small>くすみ</small> 下黒坂村、 <small>くすみ</small> 久住村、 <small>なかはた</small> 中畑村、 <small>しもすげ</small> 下菅村、 <small>おごうち</small> 小河内村	→ 黒坂村	→ 黒坂村	→ 黒坂町 (昭和11年)	
<small>かみすげ</small> 上菅村、 <small>ふくなが</small> 福長村	→ 菅福村			

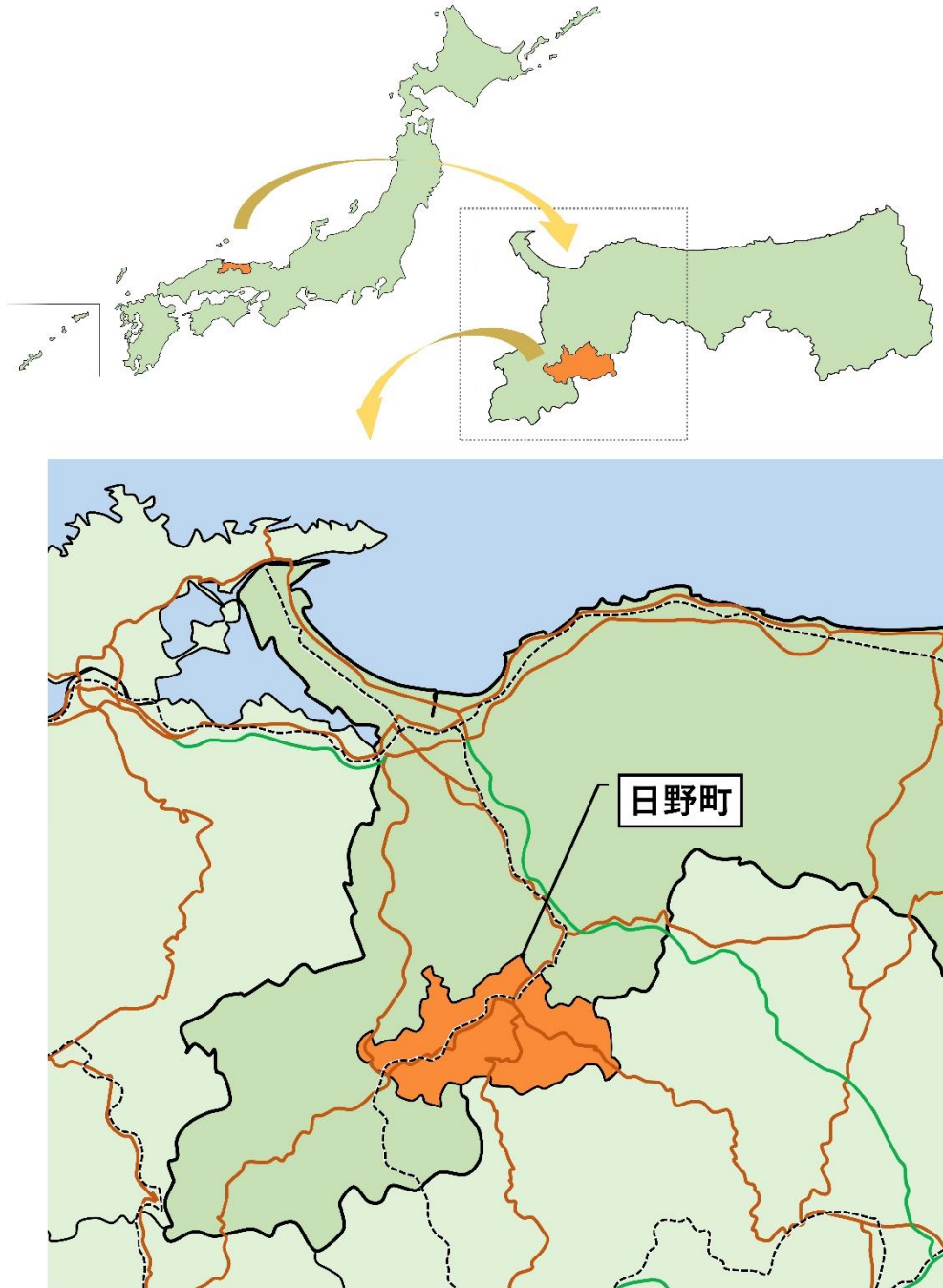


図1-1 日野町の位置



図1-2 日野町



図1-3 大正2年の根雨町・日野村・黒坂村の区域と各地区の位置

### (3) 地形・地質

#### ○地形

日野町は中国山地北斜面側に位置し、南東部には中国山地が東西に連なります。その高度は1,000mに達するところもあり、岡山県との県境をなしています。岡山県へ向かう峠として、<sup>しじゅうまがり</sup>四十曲峠、<sup>あけち</sup>明地峠があります。

北側は高度600m前後の山々が連なり、西伯郡伯耆町及び南部町との町境となっています。それらの町とは、間地峠、矢倉峠などの峠でつながっています。



寝覚峡

町南西部から北東部にかけて日野川が流下し、主な支流として近江川、<sup>てんごう</sup>天郷川、板井原川、真住川、<sup>いんが</sup>印賀川などがあります。河川沿いには河岸段丘が形成され、川沿いに形成された小平野には根雨や黒坂などの町が発達、川沿いの段丘上には街道（現在の国道180号線、181号線）が整備されました。本郷は日野川の谷幅が最も狭くなる場所であり、

両岸は切り立った急崖となりV字谷を呈し、「<sup>ねざめきょう</sup>寝覚峡」と呼ばれる侵食地形が見られます。

#### ○地質

日野町内の地質は主に中世代末期から古第三紀にかけての<sup>へいにゅうがん</sup>侵入岩類（=<sup>かこうがん</sup>花崗岩類）によって占められており、東半分には分布する侵入岩類Ⅰ（白亜紀後期の<sup>べい</sup>斑れい岩および<sup>かこうせん</sup>花崗閃緑岩）と西半分には分布する侵入岩類Ⅱ（古第三紀の花崗岩）とに分けられます。東半分の根雨南東部には、三郡変成岩類及び中生代末期の火山岩類が、花崗岩類に貫かれて分布しています。なお、東南部に分布する花崗岩類で明地峠付近に産出する<sup>びん</sup>斑レイ岩は、優黒色で一つ一つの造岩鉱物が大きく成長していることが特徴で、磨くと黒光りします。この石は<sup>みつぐり</sup>三栗

石と呼ばれ、墓石や建築用石材として利用されています。

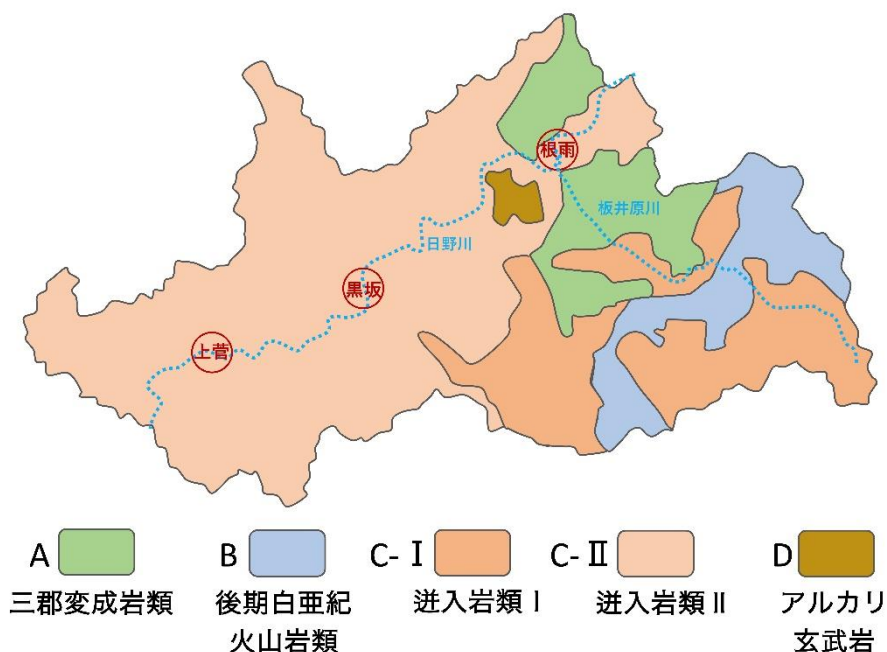


図1-4 地質図

日野町に広く分布する花崗岩類は砂鉄分を多く含有しており、産業に大きな影響を及ぼしました。砂鉄は製鉄業に用いられ、その採集のため、山腹表面に張り出している花崗岩を削り取り、水路に流して、選鉱用池で大量に収集し得る「鉄穴流し」が日野町内各地で行われました。周辺の河川には砂鉄分が川底に堆積するなどしているほか、山林内には鉄穴流しの跡とされる人為的な掘削痕や簡易的な水路跡が各所に見られます。

#### (4) 気候

日野町の気候は冬期多雨型の日本海側気象区に属し、冬期の降雪が多い地域になります。

鳥取県気象累年報（昭和30年まで）によると、年間の根雨の降水量は1,609.8mm、黒坂は1,719.4mmとなっており、6～7月にかけての梅雨と台風の影響などと思われる9月の降水量が多くなっています。また、早ければ11月末より降雪が始まり、3月頃まで断続的に続きます。積雪は多い時には1m前後となり、交通・産業などに影響を与えます。

## (5) 生態系

日野町内には約 90%を占める山林や日野川などの河川、湿地や池などがあることにより、多様な生物が確認されています。

### ○植物

本町における植生は、標高 600m 付近までは常緑広葉樹林帯、それ以上の地帯になると夏緑広葉樹林帯がみられます。中国山地一帯で採取される砂鉄と合わせて、広葉樹林などの山林を資源として近世から近代にこの地域で盛行した「たたら製鉄」の燃料である木炭が大量に製造されました。

日野町内の特徴的な植生について、久住には湿地や湿原に自生する植生が多く見られ、ミヤマウメモドキ、サクラソウ、ヒメナミキなど鳥取県内でも生育が稀な植物が確認されています。日野町南西部の福長には、県内最大のオキナグサの自生地があります。<sup>なかすげ たきやま</sup>中菅の瀧山神社周辺にはカヤラン、マツランなどが生育しているほか、同所の花崗岩塊や絶壁のある箇所ではゲンカイツツジやナンキンナカマドが見られます。日野川左岸の標高 420m に位置する<sup>うのいけ</sup>鵜ノ池畔には県内唯一のオトコゼリ自生地があるほか、オオカワズスゲ、ヒメナミキ、ムカゴニンジン、ノハナショウブなどが確認されています。金持の金持神社社叢内にはサワラとチャンチンの大木があり、ともに鳥取県の名木 100 選に選定されています。門谷のアズマイチゲは鳥取県東部佐治町などに生育していますが、西部における自生地は本町の他に知られていません。標高 400m に位置する板井原には、板井原川沿いにマメガキやケンポナシが生育し、上流部にはヒナノウスツボやカリガネソウの自生地があります。



サクラソウ



オキナグサ



アズマイチゲ



カリガネソウ

## ○鳥類

日野町内では山間地に生息する鳥類のほか、1970年代以降、水辺に生息する鳥類が増加しているのが特徴です。山野の鳥類では、カラス科のハシボソガラス、ハシブトガラス、ハト科のカワラバト（ドバト）、チメドリ科のソウシチョウなどが増加傾向にあります。

水辺の鳥類については、カモ科のマガモ、カルガモ、キンクロハジロ、ホシハジロ、ヒドリガモ、コガモ、オシドリ、カワアイサ、ウ科のカワウ、サギ科のアオサギ、ダイサギなどが日野川やその支流、堤や池などで見られます。

秋から冬にかけて越冬してくるオシドリは日野川で多く確認でき、仲睦まじい様子を観察するため県外からも多くの観光客が訪れるなど、日野町の観光資源ともなっています。



飛来したオシドリの群れ

## ○魚類等

魚類の生息場所として日野川と印賀川、近江川、天郷川、真住川、板井原川などの支流、鶴ノ池などがあります。日野川本流にはコイやフナなどのコイ科の魚類が多く、支流にはヤマメ、イワナなどの冷水を好むサケ科の魚類が生息しています。アユは日野川及び支流に多くいましたが、2010年代頃から川底の藻類が少なくなり、またカワウの食害や冷水病などの影響によって、その数が減少傾向にあります。

国の特別天然記念物に指定されている「オオサンショウウオ」は日野川を始め、その支流で確認でき、とくに上菅では昭和48（1973）年の調査で98個体の生息が確認され、「荒神原（こうじんぼら）のオオサンショウウオ生息地」として鳥取県指定天然記念物に指定されています。

## ○昆虫類

日野川とその支流、それに伴う溪谷や地下水脈によって形成された湿地、その他の池、森林などにより、ハッチョウトンボ、イシガケチョウ、コガタノゲンゴロウ、クロゲンゴロウなどの希少な昆虫が確認されています。また、河川や水田などでゲンジボタル、ヘイケボタル、ヒメボタルなどが見られます。



ハッチョウトンボ（雄）

## (6) 景観

日野町内では 90%を占める山林と中央を流下する日野川や支流などにより、川沿いには町・村・街道が発達、製鉄産業が興りました。特に根雨の近藤家住宅や町公舎、旧根雨公会堂などの製鉄産業に関係する建造物、本陣の門などの出雲街道の宿場に関する建造物があり、黒坂には近世初期の黒坂城址・陣屋跡と当時の町割りが継承されている街路、町に点在する社寺など、本町の歴史文化を特徴的に現す景観が残っています。

根雨、板井原、舟場などに見られる旧街道は江戸期に出雲街道として整備されたもので、現在の国道 180 号線、181 号線の基礎となり、山陰と山陽を結ぶ幹線道路として発達しました。

山林や河川付近に形成されている平坦地にはたたら製鉄が稼業された跡地が多く、付近の河川内には黒色の精錬滓等が沈殿しています。山腹を見ると、人為的に掘削された砂鉄採取跡が各所に確認できます。

そのほか自然地形として、日野川が大きく蛇行した「寝覚峡」に見られる奇岩のほか、奥日野県立自然公園の一部となっている瀧山神社裏の龍王滝は花崗岩から成る落差 35m の滝で、小泉八雲の小説「幽霊滝」の舞台とされています。根雨・三谷に隣接する宝仏山（標高 1,002m）は、つづら折りの登山道とブナなどの落葉広葉樹林等が広がり、自然豊かな景観を残しています。また、岡山県との県境に位置する門谷の明地峠は、真住の棚田を展望し、雲海を眺める場所として知られています。

このように山間地に形成された町と道、山林資源を活かした人々の営みを垣間見る景観が各所に残されています。



根雨



黒坂



龍王滝（中菅）



宝仏山（根雨・三谷）



## 2. 社会的状況

### (1) 人口動態

日野町の人口は、日野町が誕生した昭和 34（1959）年 5 月時点で 9,124 人でしたが、その後、平成 12（2000）年には 4,666 人と約半数に減少しました。平成 21（2009）年には 4,000 人を下回り、現在は既に 3,000 人を割っています。通学、就職のために都市部へ転出するなど、若年層の減少が町全体の人口の減少に結びついていると考えられます。国立社会保障・人口問題研究所の推計によると 2040 年には 1,500 人を下回るという推移も発表されています。人口ピラミッドでもおよそ 10 年間で若年層の急激な減少、少子高齢化が見受けられます。

表 1 - 2 平成 12 年から平成 31 年までの人口・世帯数の推移

	H12 (2000 年)	H13 (2001 年)	H14 (2002 年)	H15 (2003 年)	H16 (2004 年)	H17 (2005 年)	H18 (2006 年)	H19 (2007 年)	H20 (2008 年)	H21 (2009 年)
人口	4,666	4,539	4,489	4,490	4,425	4,327	4,213	4,173	4,067	3,965
男	2,215	2,141	2,117	2,122	2,081	2,028	1,972	1,947	1,896	1,857
女	2,451	2,398	2,372	2,368	2,344	2,299	2,241	2,226	2,171	2,108
世帯数	1,582	1,558	1,562	1,567	1,556	1,543	1,548	1,552	1,536	1,524
	H22 (2010 年)	H23 (2011 年)	H24 (2012 年)	H25 (2013 年)	H26 (2014 年)	H27 (2015 年)	H28 (2016 年)	H29 (2017 年)	H30 (2018 年)	H31 (2019 年)
人口	3,865	3,786	3,682	3,581	3,510	3,452	3,362	3,285	3,194	3,086
男	1,809	1,760	1,693	1,644	1,610	1,590	1,549	1,510	1,486	1,440
女	2,056	2,026	1,989	1,937	1,900	1,862	1,813	1,775	1,708	1,646
世帯数	1,501	1,490	1,465	1,445	1,437	1,424	1,405	1,391	1,367	1,346

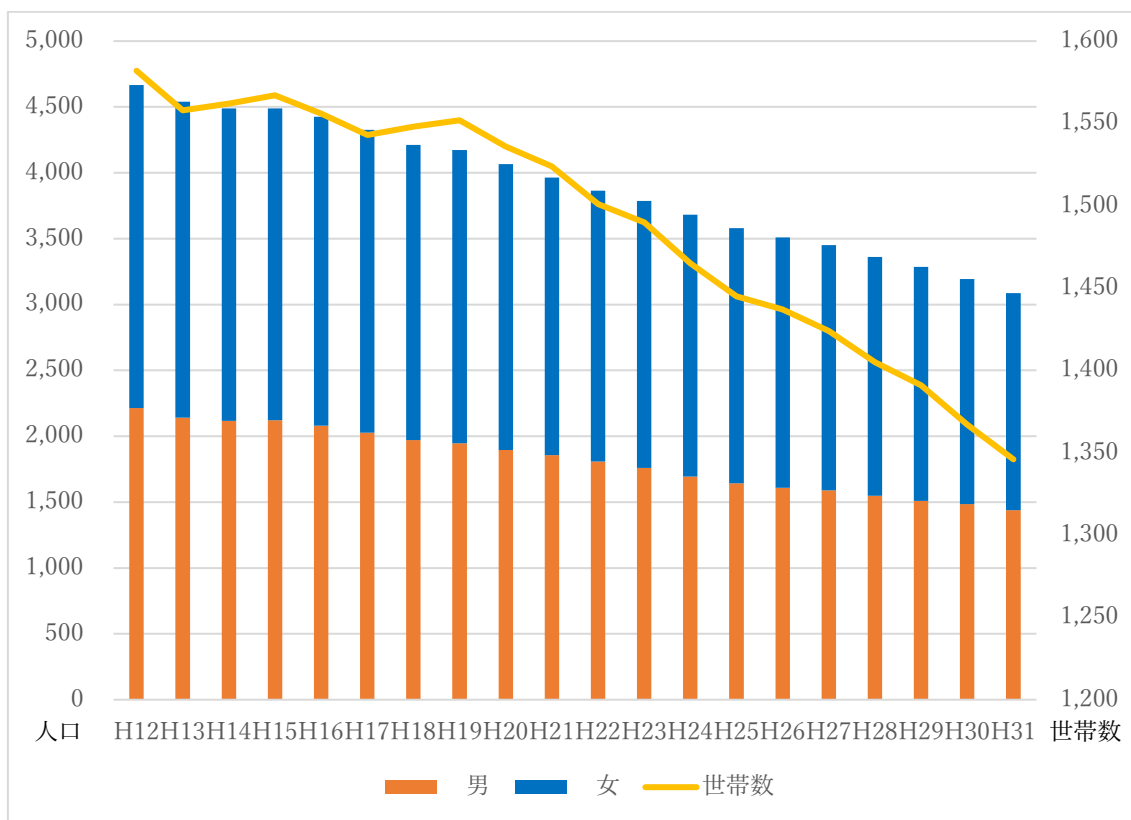


図1-5 人口・世帯数の推移

表1-3 国立社会保障・人口問題研究所の推計

	2025	2030	2035	2040	2045	2050	2055	2060
人口	2,434	2,082	1,766	1,481	1,225	1,003	825	679
男	1,094	937	792	662	548	448	368	301
女	1,340	1,145	974	819	677	555	457	378

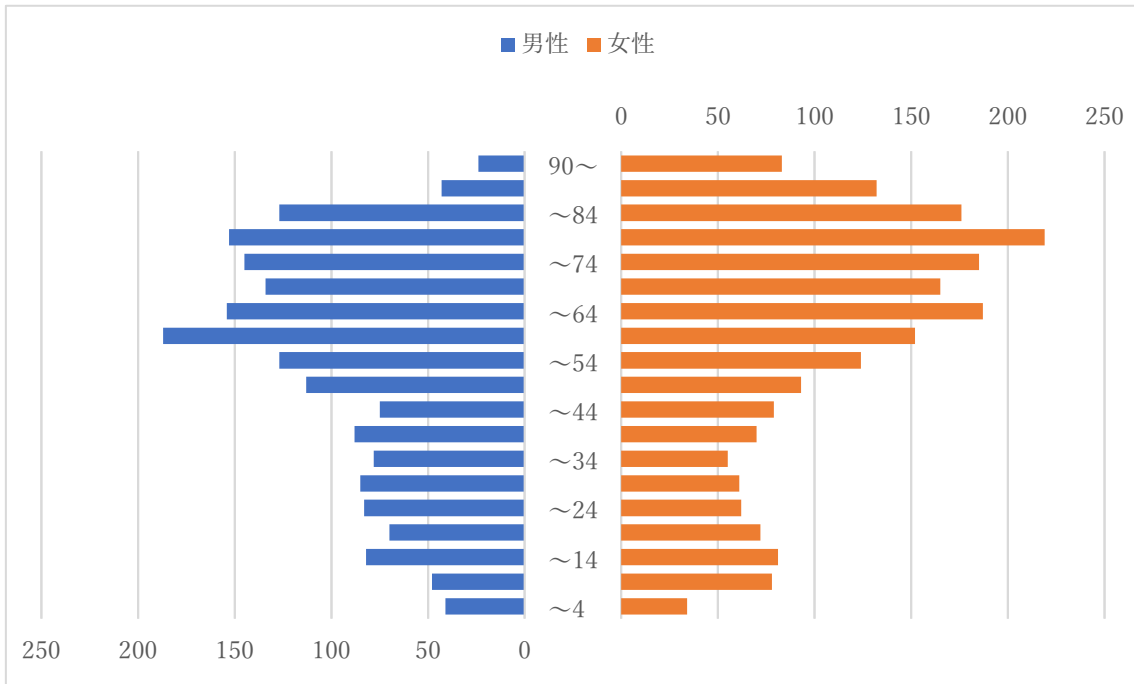


図1-6 人口ピラミッド (平成21年4月1日)

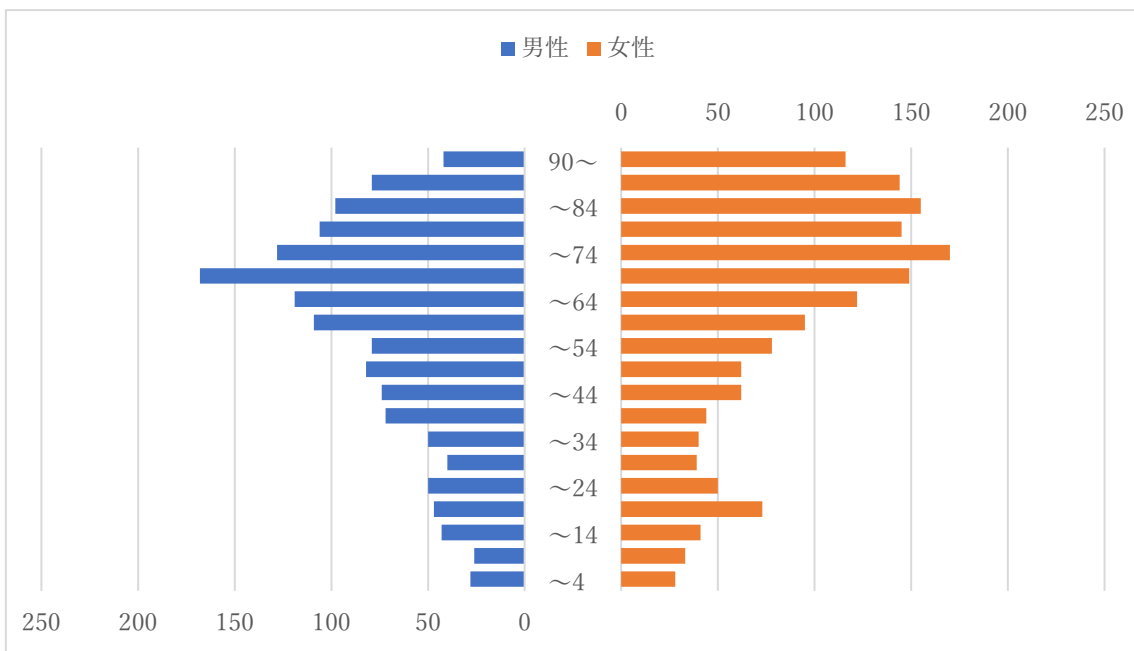


図1-7 人口ピラミッド (平成31年4月1日)

## (2) 産業

### ○農業・林業

本町の主要作物として、米、白ネギ、ソバ、ブロッコリー、ピーマン、さやいんげん、ほうれんそうなどが栽培されています。昭和 40 (1965) 年頃の農業経営は、葉たばこや畜産、あるいは林業など様々な仕事を兼ねて行われていました。江戸時代には農業の透間稼ぎ(副業)として砂鉄採取や炭焚きなどに多くの人が関わっていました。

林業は、本町域で盛んに行われてきた製鉄業との関わりで、その燃料として広葉樹林から多量の木炭が生産されました。しかし、明治中期以降、製鉄業は衰退し始めたため燃料としての木炭の使用量は減り、生活用燃料として使用されてきたものの、昭和 30 年代から 40 年代にかけて石油やプロパンガス、電気などに変わっていったため、木炭生産は衰退しました。

### ○商工業

根雨や黒坂の町中にはかつて多くの商店が並び、昭和 39 (1964) 年には卸・小売業者は 126 店ありました。

表 1 - 4 商業(卸売業・小売業)の推移

区分	店数	卸売業	各種商品小売業	衣類身回品小売	飲食料品小売業	自動車自転車小売業	家具建具什器小売業	その他小売業
S39	126	7	0	11	50	4	13	41
S45	113	9	1	14	50	4	8	27
S51	102	3	1	12	42	3	10	31
S57	116	7	2	13	44	2	11	37
S63	116	10	2	12	46	3	8	35
H6	89	5	0	11	30	4	3	36
H11	79	6	0	8	29	4	2	30
H16	73	4	1	7	25	3	3	30
H24	53	6	0	5	15	4	0	23
H26	56	6	0	5	15	7	0	23

飲食料品の小売業が最も多く、衣類身回品小売業がそれに次いでいます。昭和期に国道の整備などがされると岡山県新庄村（真庭郡）や、新見市千屋方面からも買い物客が見られました。



根雨の町の風景（昭和 54 年）

### （3）土地利用

日野町内の約 9 割が山林・原野、残り 1 割は田畑などの耕地、宅地、そのほか道路や河川などとなっています。田畑については、鉄穴流しによって切り崩された山林が田畑として転用されてきたなどの履歴があります。

しかし、日野町制施行以降、過疎化、少子高齢化が進み、また農業離れによって耕地面積は減少しつつあります。住宅需要や公共施設の整備に伴い、耕地が宅地へと転換もされています。

表 1 - 5 土地利用の推移 (単位 ha)

年次 区分	昭和 35 年	昭和 55 年	平成 12 年	平成 22 年	平成 27 年
耕地	587	583	450	416	408
森林	12,407	11,975	11,897	11,926	11,925
宅地	64	78.5	103.0	106.7	107.0
その他	229	650.5	952.0	953.3	958.0
合計	13,287	13,287	13,402	13,402	13,398

#### (4) 交通

日野町は、松江市・米子市から岡山県へとつながる国道 180 号線、181 号線、米子市から広島県へとつながる 183 号線が主要な道路となっています。国道 181 号線は岡山県美作地方の真庭市や新庄村へ向かう道路で、江戸時代に松江藩の参勤交代の道として利用されてきた「出雲街道」が基礎となっています。道路網から見ると、日野町はこの 3 路線が縦断し、岡山県、広島県へ分岐する地域であり、山陰・山陽を結ぶ中継地としての特徴があります。

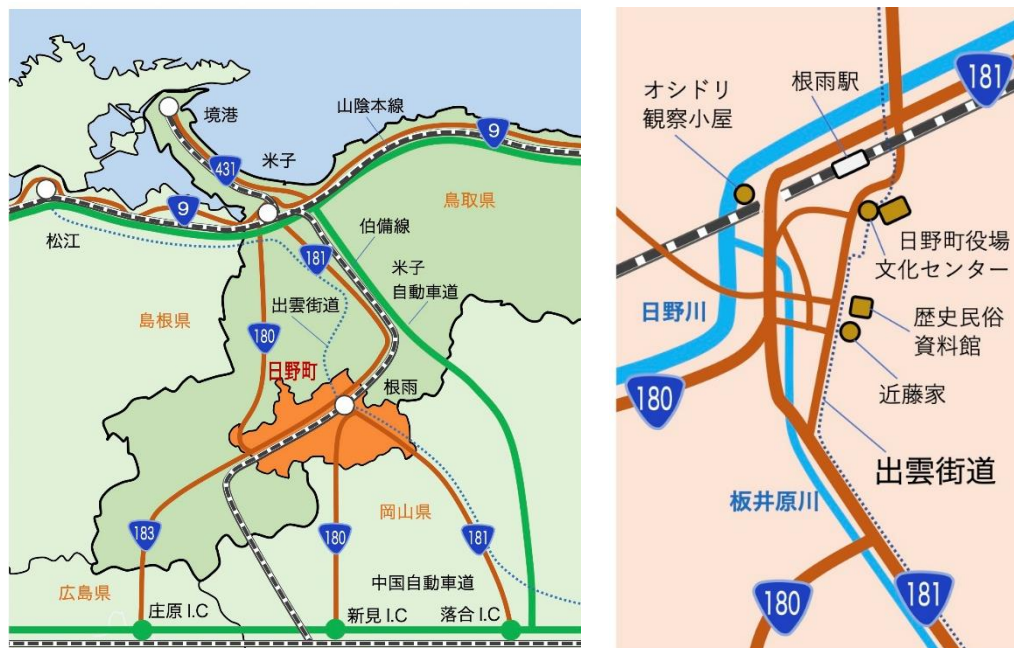


図 1-8 日野町の交通

鉄道は、米子・岡山間を結ぶ伯備線として日野川沿いに線路が敷かれ、大正 11 (1922) 年に根雨駅と黒坂駅が、大正 14 (1925) 年に上菅駅が開業し、現在に至ります。停車本数は概ね 1 時間に 1 本程度、根雨駅は特急の停車が 1 日 7 本となり、利用減少による減便が危惧されています。その中で、令和 4 年 7 月 31 日に根雨駅が、11 月 10 日に黒坂駅が開業 100 周年を迎え、地域による JR の維持や継承の活動が行われています。

バス路線は、菅福線、奥渡線、板井原・真住線、根雨宿・病院線の 4 路線が町営で運行され、住民の交通手段となっています。令和 3 年 4 月からは、町が運行管理者となり自家用有償旅客運送にてタクシー車両を運送する「タクシー町営化」を実施しています。

#### (5) 観光

奥日野県立公園に指定されている滝山たきさん、鶴ノ池などが日野町の主な観光資源として活用されてきましたが、昭和 58 (1983) 年頃より、金持神社を活かした取り組みが行われています。縁起の良い社名を活かし、「金持まつり」としてさまざまな行事が実施されてきました。これらの取り組みにより、現在では年間約 20 万人以上の参拝者があります。

また、秋から冬にかけて日野川に飛来するオシドリは、長年にわたり、給餌活動やオシドリの住みやすい環境づくりが行われ、まちの風物詩として町内外に知られるようになりました。平成6（1994）年に結成されたオシドリグループは、日野川付近に設置されたオシドリ観察小屋を中心にオシドリの保護啓発活動を行ってきました。現在では、年に約1,000羽の野生のオシドリが飛来し、多くの愛鳥家が日野町を訪れています。なお、観察小屋は令和4（2022）年に鳥取県立日野高等学校グラウンド内に新築されて運営しています。



金持神社の参拝客

また、町の歴史を紹介する施設として日野町歴史民俗資料館があります。当館はもともとたたたら製鉄で財を成した近藤家7代寿一郎によって根雨公会堂として建造、町に寄贈され、町主催の催しや文化的な行事の会場として用いられてきましたが、昭和61（1986）年に民具や農具などを展示する資料館として改修、開館しました。現在、江戸時代後期から昭和にかけての町の様子を知ることができる展示施設として運営しています。

町を縦断する日野川はカヌースラローム競技の適地と知られており、昭和59（1984）年よりカヌー選手権が開かれています。また、新たなリバースポーツ（※2）としてラフティングも平成18（2006）年から毎年行われています。

（※2） 川や湖等で行われるスポーツ



オシドリ観察小屋



カヌー大会



リニューアルオープンした  
オシドリ観察小屋

## (6) 鳥取県西部地震による被災と文化財保護活動

平成 12(2000)年に発生した「鳥取県西部地震」は、日野町の文化財保護にも大きな影響を及ぼしました。

地震は 10 月 6 日午後 1 時 30 分、鳥取県西部（現南部町）の地下 10km を震源として発生しました（マグニチュード 7.3）。震源となった断層は日野町を通っており、根雨で震度 6 強を観測する大地震でした。住宅被害は全壊 129 戸、半壊 441 戸、一部損壊 945 戸の計 1,515 戸で、人的被害は工事現場で土砂崩れによる生き埋め、家屋倒壊の下敷など、重傷 4 人、負傷 10 人、計 14 人でした。

日野町内の文化財の被害状況は、長楽寺所蔵の国重要文化財・薬師如来両脇侍像の足元と台座をつなぐ箇所の一部損壊、同寺所蔵の国重要文化財・毘沙門天立像の左手宝塔の落下、鳥取県指定天然記念物・根雨神社社叢の樹木根元石垣の一部崩壊、聖神社社叢の樹木根元付近のブロック塀の一部損壊、国登録有形文化財である日野町歴史民俗資料館（旧根雨公会堂）の各所ひび割れ・タイルの剥離が認められ、未指定文化財についても榎市一号墳の古墳石の一部損壊などの被害が確認され、修繕等が行われています。

また、江戸後期から大正時代にかけて「たたら製鉄」を経営した近藤家住宅に所蔵されていた近藤家文書に被害はありませんでしたが、史料の安全性を考慮して鳥取県立公文書館に寄託されることになりました。



### 3. 歴史的背景

#### (1) 先史

##### ○旧石器時代

人々が狩猟と採集をしながら移動生活を送っていた旧石器時代に属す遺構等は、日野町域では未だ確認されていません。ただ、日野町周辺の西伯郡伯耆町溝口地内の代遺跡・三野野遺跡・忠魂碑原、日野郡江府町山神脇遺跡などで旧石器から縄文時代草創期の讃岐産サヌカイト製の有舌尖頭器（石槍）が出土しており、このような周囲の遺構出土状況から、本町域でも讃岐地方やその他近隣地域との間で、人々の移動や交流があったものと考えられます。

##### ○縄文時代

日野町内で確認されている縄文時代の遺構として、上菅荒神原遺跡（日野町上菅）と福長下モ谷尻り遺跡（日野町福長）が確認されています。上菅荒神原遺跡では、複数のピット（円形の小穴）群の検出から、竪穴住居ではなく、平地住居であったことが推定されています。また、縄文時代早期から弥生時代後期までの各種土器が出土しており、各時期の土器の出土量から、定住的な様相と、またそれ以外のわずかな期間の生活の痕跡がみられ、断続的に使用された地であるとともに、石器や落とし穴などの遺物・遺構の検出と小河川が大河川に流れ込む小高い立地状況から、狩猟や漁撈を行っていたと考えられています。

福長下モ谷尻り遺跡は印賀川を見下ろす丘陵上に所在し、ピット 3 基と突帯文の見られる縄文土器、石鏃などを検出しています。そのほか、黒曜石の薄い剥片が多数出土しており、狩猟を行うための石器製作の痕跡と推定されます。

そのほかには、日野町野田字御崎ノ前から磨消縄文を持つ縄文時代後期の土器が出土しています。

周辺地域では縄文時代の遺跡として日南町福万来で権現ノ前遺跡（後期）、江府町助沢で竜王遺跡や美用遺跡が確認されているほか、江府町宮市では有舌尖頭器、佐川第 1 遺跡で早期から前期と後期から晩期の土器が出土しています。



荒神原で検出された住居跡と土器

## ○弥生時代

日野川に面した緩傾斜地に位置する本郷字菩提寺において、弥生時代の遺跡と推定される岩田遺跡（菩提寺遺跡）が見つかっています。弥生時代中期中葉のものとされる円形の竪穴住居跡や土器等が確認され、日野川沿いの河岸段丘及び谷川沿いの小平野など狭小な谷合いで生活をうかがわせます。



岩田遺跡で確認された円形の竪穴住居跡

そのほか、旧日野産業高等学校（現：日野高等学校黒坂施設）グラウンド内より石斧が出土し、また上菅からは弥生土器片、黒曜石片が見つかっています（上菅所在遺跡）。

## ○古墳時代

日野町内で確認されている古墳は13基で、主に日野川及び支流の沿岸部丘陵に見られます。墳形は貝原古墳や下榎1号墳など円墳が多く、石室形状は岩田古墳や榎市1号墳、横手古墳など横穴式石室がほとんどであり、現在確認されている日野町内の古墳の多くは古墳時代後期のものと考えられます。また、舟場古墳では直刀、刀子、管玉、須恵器などの遺物が見つかっています。

集落遺構は岩田遺跡があり、平面方形の竪穴住居跡が確認されています。これは弥生時代の竪穴住居跡に重複して検出され、一辺が5m程度で、出土した土器から古墳時代前期の竪穴住居跡と考えられています。また、福長には古墳時代後期のものと考えられる横穴墓が確認されています。

## (2) 古代

### ○奈良時代

大宝元(701)年に制定された『大宝律令』、天平宝字元(757)年に施行した『養老律令』を基に天皇を中心とした律令国家が全国を統治しました。国と郡には国衙(国府)、郡衙(郡家)の役所(官衙)が置かれ、人々を戸籍に登載し「公民」と位置づけ、税や兵役を課し、地方の豪族らを役人として登用しました。郡衙の位置については、日野町黒坂付近にあったとする説と日南町旧郡家付近にあったとする説があります。

また、天平5(733)年成立とされる『出雲国風土記』の仁多郡の項目の中には、「通伯耆国日野郡堺阿志毗山、卅五里一百五十歩」と記され、島根県仁多郡から日野郡までの距離が記されており、「日野」という地名が当時から存在していたことが分かります。

なお、日南町神福中野遺跡では8世紀前半の一号竪穴建物跡床面の土杭から、製鉄に伴

う製錬滓である鉄滓<sup>てつさい</sup>が出土しています。このことは本町域においても 8 世紀頃に鉄生産が行なわれていた可能性があることを示しています。

## ○平安時代

現在の日野町域は、『和妙類聚抄』(10 世紀前半)によれば、古代律令制において日野郡に相当し、その郡には葉路・阿太・神戸・武庫・日野・野上の六郷があるとされます。

本町には寺社の荘園(私有地)として、福長に山城国石清水八幡宮領があったと伝わっており、また荘園からの貢納物について伯耆国から東寺へ「鉄」が納められたことが分かっています。延久 3 (1071) 年には鉄 200 延、康和 6 (1104) 年には 3 年分として鉄 5,640 延が納められています。また、『延喜式』(10 世紀前半)には調として鉄・鉄、庸として鉄が記されているほか、『政事要略』(11 世紀前半)には地子<sup>ちし</sup>(地代)雑物として鉄の記載があります。これらのことから、古代から既に鳥取県西部地域で鉄の生産・加工が行われていたことが分かります。

一方、長楽寺(下榎)に所蔵されている仏像群や社伝によつて、当地域の仏教の浸透や信仰の一端が確認できます。長楽寺には現在、本尊として薬師如来(平安末期)、その脇侍に日光菩薩(平安末期)、月光菩薩(平安末期)、そして毘沙門天(平安末期)、不動明王(平安末期)が存立し、この 5 体は国重要文化財に指定されています。同寺は 12 世紀の源平争乱時の兵火による被害を受けて衰退しますが、以仁王<sup>もちひとおう</sup>の臣で伯耆に配流されてきた長谷部信連<sup>はせべのぶつら</sup>により再興したと伝わります。



長楽寺所蔵の仏像群



毘沙門天



月光菩薩



薬師如来



日光菩薩



不動明王



十二神将

長谷部信連(以下、信連という)の当地域での活動は長楽寺再興のほか、賀茂神社(野田)、安井神社(津地)、延暦寺(根雨)の建立に関与していると伝承されています。また、信連を追って来郡した子息により厳島神社(下榎)が建立されました。子息とともに当地に来た郎党の中には土着した者もいたとされ、その名が現在の字名の由来となっている説もあります。信連自身は日野に7年程度しか滞在しませんでした。当地域で社寺の再興・建立などに広範囲に関わっている人物として注目されます。なお、配流された信連は最初に金持にきているため、同所に拠点を置いていたとされる豪族の金持氏との関係が考えられ、信連の短期間での様々な活動を見ていく上で重要な点です。金持から移転した下榎には信連の屋敷跡と伝わる遺構があります。

また、長楽寺には町指定文化財の十二神将像(鎌倉～室町)と不動明王の脇侍として、<sup>こんが</sup>矜羯羅童子像と制吒迦童子像が保存されています。



長谷部信連の屋敷跡と伝わる場所



巖島神社

表1-6 文献などから確認できる長谷部信連の日野での活動内容

活動内容など
【居住地】金持村（配流直後）、下榎村（転居先）
【寺社の建立・再興】 延暦寺（根雨）、長楽寺（下榎）、賀茂神社（本郷）、賀茂神社（野田）、安井神社（津地） 巖島神社（下榎）
【子息・郎等について】 子息・太郎實信が巖島神社を建立 ※社伝では信連が安芸宮島の巖島大明神より勧進奉祀 郎党の安井・津知・渡里・檜原・相藤・小河内等、信連・實信を追って来郡

平安時代において、朝廷の警固役や領主の荘園管理等に刀を武装した、いわゆる「武士」が出現し始めますが、彼らが所持していた刀はこの時代に直刀から、反りが入った日本刀へ徐々に変化していったものと考えられています。

とくに平安時代後期に日本刀が成立したと考えられており、当時の刀工の一人である伯耆国安綱については、『御伽草子』に登場する鬼・酒吞童子討伐に使用された日本刀「童子切」や「鬼切丸（髭切）」の刀工として知られています。童子切については、江戸時代初期の酒吞童子に係る伝本に「坂上田村麿が伯耆国会見郡（現米子市・境港市・南部町・伯耆町の一部）の大原に居住する刀工安綱を召して作らせた」とあり、会見郡内に存在する「大原」が居住地として有力な説となっています。なお、日野町上菅にも安綱の妻を祀ったという小祠が伝わっています。

### (3) 中世

#### ○鎌倉時代

金持には金持氏の拠点があったと考えられています。『愚管抄』巻第六にみられる「伯耆国守護武士ニテカナモチト云者アリケル」は金持六郎<sup>ひろちか</sup>広親という人物を指し、当時伯耆国守護を務めていた人物とされます。また、「大山寺縁起」巻下に見られる大山宝殿造営者の金持広重、大山地蔵会の頭役を兄弟で争ったとされる金持広綱もその一族とされます。

「金持」という地名の由緒は当地に産出する砂鉄に関連するという説があり、製鉄の原料となる砂鉄は金に匹敵する価値のあるものとされ、「砂鉄が多く産出する地」「砂鉄を多く所持している地」などとする地名の由来が伝承しています。金持氏はこの砂鉄を掌握し、製鉄業によって勢力の基盤としていたといわれています。

『吾妻鏡』<sup>あづまかがみ</sup>に見られる「金持右衛門尉」、「金持兵衛尉」、「金持次郎左衛門尉」、「金持兵衛入道跡」などは、駿河金持荘や北条氏との関係等を考慮する必要があり、伯耆金持氏との関係は不明です。

#### ○南北朝時代

後醍醐天皇の倒幕活動から隠岐配流、建武新政府樹立の過程で、その往還により、鳥取県内には後醍醐天皇に関わる伝承が各地に残され、本町にも通行に関わることが伝わっています。

日野町板井原は後醍醐天皇が通行した地の一つとされ、同行していた侍医の池田将監<sup>いけだしろうげん</sup>を板井原に留ませたという伝承が残っています。池田将監は共に隠岐へ向かう志を持っていましたが、板井原において後醍醐天皇に引き留められました。池田将監愛用とされる弓が末裔の家に伝わっています。また、ゆかりの品として後醍醐天皇が着用したとされる錦の織物の「衣片」が個人宅に伝わっています。

日野町門谷に所在する「明地峠」についても、その峠の名は後醍醐天皇が隠岐配流の際に峠で夜明けを迎えた峠であることに因んでいるということや、門谷村の地名は隠岐配流の時の行在所であったことによる帝谷（みかどたに）が転訛した、などの後醍醐天皇通行に関わる伝承が残っています。

隠岐を脱出して船上山<sup>せんじょうざん</sup>での挙兵に際しては、『太平記』巻第七「船上合戦事」によれば、その様子を「主上（後醍醐天皇）隠岐国より還幸成て、船上に御座有と聞へしかば、国々の兵共の馳参る事引も不切」とし、出雲守護塩谷高貞、富士名義綱、浅山二郎などが参集、金持氏も「金持の一党三百余騎」が馳せ参じたと記載されています。そして、巻第十一「諸将被進早馬於船上事」では後醍醐天皇の京都への帰還に、金持大和守が錦の御旗を持して共に行軍したことが記されています。なお、金持大和守は金持景藤<sup>かげふじ</sup>のことと考えられており、金持地内に金持景藤の宝篋印塔<sup>ほうきやくいんとう</sup>が伝わっています。また、金持氏の砦として「大要害」、「小要害」という、地形を利用した山城跡があります。

## ○室町時代・戦国時代

室町時代から戦国時代にかけての日野の地は、国人領主（日野氏、日野山名氏、進氏、蜂塚氏など）による統治が行われていました。彼らは戦国大名ではありませんが、在地に強い影響力を持つ存在で、地域の有力者としてその地を実質支配していました。

しかし、永正年間（1504～1520）から大永年間（1521～1527）頃にかけて西伯耆各地に侵攻した出雲の尼子氏とそれに対抗する毛利氏との戦乱の中で、合戦の状況を見ながら両氏に従属していくようになります。

西伯耆の中でも日野郡は早くに尼子支配が及びました。その理由として山陽方面に出る交通の要衝地であったことが挙げられ、尼子氏は天文元（1532）年にはすでに備中・美作へ侵攻しています。尼子経久の侵攻を受けて、伯耆の国人領主たちは尼子氏の傘下に降るか、国外に退去するかを選択に迫られたようです。鎌倉時代には日野町黒坂から日南町下石見にかけての地頭であったとされる日野氏が尼子氏に従い、日野山名氏は国外に退去したと考えられています。

平安末期以降、土着していた信連の末裔である下榎長谷部氏は、11代元秀が永正5（1508）年に大内義興の催促に応じ戦功を挙げ、備前児島庄を賜っています。天文年間（1532～54）、12代の信澄は毛利元就に属し、天文23（1554）年芸州折敷畑にて陶隆房との合戦で痛手を負い、弘治元（1555）年に死去しました。14代信清の時に姓を「雅樂」に変え、武門を改め社家になりました。

## （4）近世

### ○安土桃山時代・江戸時代

#### 政治

日野の地は、天正9（1581）年には毛利方の吉川氏の領地となり、慶長5（1600）年関ヶ原の戦いで徳川氏が勝利すると、毛利氏の領地は削減され、伯耆には中村氏が入封しました。そして、慶長15（1610）年に伊勢亀山（三重県伊勢市）より5万石で関一政が入り、黒坂を拠点としました。

当時の黒坂の状況を『黒坂開元記抄』は、「慶長三年の頃迄は高里古市横手といふて三ヶ村にて小川南へ流れ薄霧立のほり茫々たる澤野にして人住里とは見えざりしが（後略）」と寒村の様子を記しています。

しかし、関氏の入封により町割が行われ、家数1,007軒の城下町となりました。町割については、下榎長谷部氏17代の雅樂相模守正忠が関わり（『黒坂開元記抄』）、地鎮祭や、東西南北に鉄札の設置、地神を南に祀るなど、町づくりの基礎



黒坂城址・陣屋跡

を担いました。

元和3(1617)年に池田光政領、寛永9(1632)年には同族の池田光仲と国替えになり、伯耆と因幡2つの国は池田氏のもとで「鳥取藩」という一つの行政区画として幕末まで至ります。池田氏は藩内のいくつかの地を家老や重臣に知行地として与えて、その地域の管理を任せました(自分手政治)。日野地域は重臣の福田氏に管理をさせ、



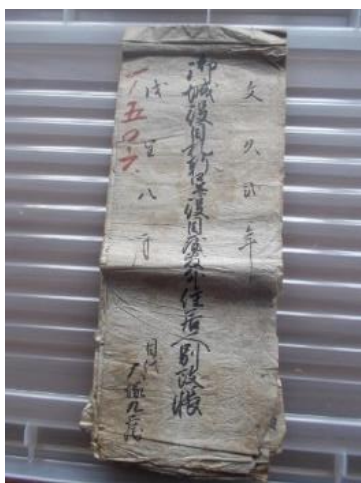
黒坂陣屋跡に残る桐形虎口

その拠点を黒坂とし、陣屋が設置されました。黒

坂支配について、平常、福田氏は鳥取に居て、黒坂は城奉行や組土等に任されていました。

陣屋施設のいくつかは、関氏の黒坂城を転用しているものと考えられます。現在も陣屋の石垣や桐形虎口などの防御施設が残っており、当時の様相を伺い知ることができます。

黒坂の町に目を向けると今でも多くの寺院が建ち並び(光西寺、泉龍寺、正法寺、光徳寺、光明寺)、城下町に見られる寺町のような景観が見られます。文久2(1862)年に作成された「黒坂町御城役目札軒口并役目屋敷外住居人別帳」によって、幕末の黒坂陣屋町の様子がわかります。各屋敷には「役目札」というものが配されています。これは『黒坂開元記抄』に記されている「御屋敷普請繕諸事掃除萬々人夫町中役目にて相勤る也昔関氏開地より或例也」に見られる各居住者に割り当てられた「役目」と考えられ、陣屋に係る普請や清掃等について黒坂町の居住者が「役目」として関わっていたことを示すものと推測されています。屋敷の間口の広さによって役目札数が定められたものと思われ、この慣例は関氏統治時代よりあるものであると『黒坂開元記抄』には記されています。また、陣屋に近い小高い山麓には福田氏4代・8代の墳墓があります。家老であった山上半大夫の墓も寄り添うように並び、地域の住民から「お墓さん」として親しまれ大切にされています。



「黒坂町御城役目札軒口并役目屋敷外住居人別帳」(日野町歴史民俗資料館所)



江戸後期、外国船の出現等による外圧によって、幕府の権威が揺らぎ始めるとその方向性を巡って西南雄藩をはじめとする諸藩は水面下で活発な動きを見せるようになりました。鳥取藩でも藩内で意見が対立し、藩幹部を襲撃した京都本圀寺事件が発生しました。事件を起こした藩士たちは黒坂の泉龍寺に護送、幽閉され、処分が下るまで彼らは福田氏の知行地の中で過ごしました。泉龍寺には彼らの遺品が多く残されており、「<sup>いんぱん</sup>因藩二十士遺品」として今に伝えられています。



因藩二十士の遺品



供養石柱

## 産業

地域の経済活動について、江戸時代の中心経済である米（農業）のほかに、農業の余業として住民の大半が従事していた製鉄関係の仕事が見られます。

『日野郡下菅村余業人取調帳』によると、農業以外の仕事に従事している人が多く、下菅村は全 19 世帯の内、農業と余業の兼業が 17 軒でした。余業の中で注目されるのは川砂鉄採取で 9 軒あり、鉄穴流しを示す「鉄穴稼ぎ」と合わせ、砂鉄採取作業に関わる家は 10 軒にのぼります。

近世は根雨の手島家や近藤家、黒坂の緒形家をはじめ、中小の鉄山師<sup>てつざんし</sup>を多く輩出し、日野郡内のいたる所でたたら経営が行われていました。大鉄山師となれば、複数のたたら場を経営し、また物資の搬入コストなどを検討しながら、操業地の移動を繰り返したため、日野郡内には多くのたたら跡地が残っています。鉄山師たちの製鉄事業は地域に様々な仕事（砂鉄採取、炭焼き、物資運搬など）を創出し、雇用が生まれました。たたら製鉄は、周辺の豊富な資源から砂鉄や木炭が確保できることによって、日野の基幹産業になるとともに、地域の人々にとっては生活の基盤となるものでした。



近藤家住宅（根雨）

とくに根雨の近藤家は明治期の安価な洋鉄輸入にも耐え、大正期まで製鉄業を行った鉄山師として知られています。近藤家は安永 8 (1779) 年から製鉄業を始めたとされ、徐々に

その経営規模を広げて、大坂に出店を構え、独自の販売ルートを築くなど大鉄山師に成長しました。こうした近世製鉄業の様相を記した「近藤家文書」が多数残されています。

製鉄業が行われた現場である鉄山は、「山内」と呼ばれる専門空間が作られ、鉄山で働く者は、近村から出向く者もいたようですが、そのほとんどは山内に住み込みで仕事をしていました。山内で暮らしている人々は、根帳（宗門改帳）に登載されておらず、鉄山師の管理下に置かれていました。こうした、いわば閉鎖的な空間の中で、たたら製鉄の慣習や技術は洗練され、当地域の特殊技術として認識されていったものと思われます。下原重伸が著した『鉄山必用記事』（1784年）はこうした製鉄技術を克明に記した史料として知られていますが、日野町が所蔵する『鉄山要口譯』はその草稿の写しとされています。なお、幕末に薩摩藩の島津斉彬はこれらの製鉄技術を得るために、鳥取藩に対して村下（製鉄技術習得者）の招聘を依頼しています。

## 宿場町

近藤家が本店を構えていた根雨宿（日野町根雨）は、出雲街道の宿場町として賑わいました。

出雲街道の整備は、鳥取藩によって運送費・宿泊費の設定がされたほか（在方御定）、寛文年間（1661～73）に根雨宿の恩田家、緒形家、板井原宿の桂藤家、矢田貝家などによって本町域の出雲街道が整備されています。また、間地峠の出雲街道内には船場村（日野町舟場）の佐々木家が改修したと伝わる石段が残っています。



本陣の門（根雨）

松江藩は参勤交代で出雲街道を頻繁に使用し、根雨には本陣、板井原に茶屋を設定しました。本陣の建物は残っておらず、門のみ移築し現存しています。これは根雨が宿場町であったことを物語り、「本陣の門」として日野町指定文化財に指定されています。

また本陣に掲げられ、「出雲少将宿」と墨書された関札も残っており、松江藩主の参勤交代と根雨宿の通行を示します。

根雨の町を歩くと宿場の面影を各所に見ることができます。根雨の緒形家はかつて本陣を務め、その後、藩から茶屋としての役を受けました。現在も緒形茶店として根雨の宿場の風情を感じることができます。

また、物資の運搬の道としても役割を果たし、たたら製鉄による鉄製品の運搬のほか、安来より中海産のうなぎが大坂へと運ばれました。江戸中期、中海の安来港を中心とする海域でうなぎの豊漁が続き、安来宿から出発して、本町域では舟場村、根雨宿、板井原宿を通り、うなぎを運搬していました。「うなぎの道」としても利用された出雲街道で、舟場にはうなぎを休ませたといわれる「うなぎ池」が伝わっています。



関札「出雲少将宿」

## (5) 近代・現代

### ○明治時代

江戸幕府が朝廷に政権を返上し、日本近代化への大きな転換点となったいわゆる「明治維新」は、日野の地においても政治・経済・文化等に大きな変革をもたらしました。町村の枠組みでは、大小区制、三新法、区町村会法などが明治元（1865）年から明治 21（1888）年にかけて公布され、町村合併が進められていきました。さらに、明治 22（1889）年から昭和 21（1946）年にかけて、市制町村制、府県制、郡制などが公布され終戦後まで継続しました。

日野町域では明治 22（1889）年に 27 の村が合併して 6 か村が誕生しました。こうした合併の基礎となったのは小学校一校の区域となる約 300 戸から 500 戸で、それが町村の標準規模とされました。

産業は、古来より当地域の基幹産業であった製鉄業が、安価な輸入鉄の参入や明治 14（1881）年頃の不況によって、和鉄の売り上げは減少の一途をたどり、事業継続の岐路に立たされます。根雨近藤家 5 代当主喜八郎はこの状況に対処するため、それまでの販売圏域であった近畿一円・東海道方面に加えて、新潟県出雲崎や直江津、富山県高岡、山形県酒田など北国を新たな商業圏として販路の開拓を行い、明治 18（1885）年にはこれらの地域と取引を始めています。また明治 14（1881）年頃、兵器材料の国産化を検討していた海軍省からの受注を獲得するため、製品の品質を向上させる技術改良や経営合理化を図ります。大鍛冶設備に汽鎚を導入して動力化したほか、製鉄炉の送風を従来の人力の天秤鞆からトロンプと呼ばれる流水を利用した送風装置や水車鞆などを導入しています。明治 36（1903）年頃には鉄鋼の強度を阻害する燐分を低減した低燐製鉄の実用化に成功、「特種銑鉄」を量産、後に官営八幡製鉄所や日本特殊鋼合資会社などに納入し、近藤家の主力製品として経営を支えました。

なお、明治中期に近藤家が経営した鉄山として、中菅に都合山つごうやまたたら跡があります。都合山たたらは明治 22（1889）年～同 32（1899）年に経営されたもので、高殿（製鉄炉）、砂鉄洗い場、鍛冶場、鉄池、銅場などの遺構が残ります。明治 31（1898）年、東京帝国大学の冶金学者であった俵国一たわらくにいち博士は日本古来の製鉄法について調査するため、現地を訪問し、詳細なスケッチや図面、そして操業風景の写真を残しています。



都合山たたら跡（中菅）

## ○大正時代・昭和時代

大正期にも町村合併が行われ、大正 2 (1913) 年には根雨村と真住村が根雨町、渡村と安井村が日野村、黒坂村と菅福村が黒坂村となりました。その後、黒坂村は昭和 11 (1936) 年に町制をしいて黒坂町となっています。さらに、昭和 22 (1947) 年には地方自治法が施行、昭和 28 (1953) 年に日野村と根雨町が合併して根雨町に、昭和 34 (1959) 年に根雨町と黒坂町が合併して、現在の日野町が誕生しました。

製鉄業は、近藤家が引き続き経営を行っていて、第一次世界大戦の勃発時には、近藤家が製造する特殊銃鉄せんてつなどの需要が高まりますが、大正 7 (1918) 年に休戦となると鉄鋼の不況が続き、近藤家の事業も低迷していきました。そして、大正 10 (1921) 年には経営していた鉦 3 カ所 (吉鉦山、新屋山、谷中山) の閉山を決め、本町における古来の「たたら製鉄」の歴史に幕を閉じることになります。

近藤家は明治末頃よりクロム煉瓦や酢酸の製造に着手するなど、製鉄業の傍ら、そこで得られた知識などを基に他事業への可能性を追求する活動を行っています。この精神と行動、技術の導入は、本町の産業経済・文化について各種方面で影響を与えました。この近代技術や知識・ノウハウの導入は、日野の産業史の注目すべき点であると同時に、日野町の近代化の推進にも大きく貢献しました。

根雨の町に残る旧山陰合同銀行根雨支店は、もとは明治 30 (1897) 年に近藤家 5 代喜八郎によって設立された根雨銀行を前身とし、建物は昭和 4 (1929) 年に建築されたものです。また 7 代寿一郎は、酢酸製造の木材乾溜工場に付属した発電所の剰余電力を利用し、根雨電気株式会社を設立するなど町の経済発展に影響を与えたほか、大正 6 (1917) 年に、当時、音楽教材としては珍しいピアノを根雨小学校に寄贈し、大正 11 (1922) 年にも同小学校に膨大な理科教材を寄付し、教育にも貢献しました。さらに、昭和 15 (1940) 年には根雨公会堂を建設して、根雨町に寄贈しています。

「たたら製鉄」や近藤家の事業は、日野町の成り立ちに深く関わっており、日野町の歴史に欠かすことはできません。



近藤寿一郎が根雨小学校に寄贈したピアノと理科教材の標本